

PROGRAM

シューベルト

Franz Schubert

即興曲集

Impromptus

D935-1 へ短調

D935 No.1 in F minor

D899-2 変ホ長調

D899 No.2 in E-flat major

D899-3 変ト長調

D899 No.3 in G-flat major

D935-4 へ短調

D935 No.4 in F minor

シューベルト

Franz Schubert

メヌエット 嬰ハ短調 D600

Minuet in C-sharp minor D600

ラフマニノフ

Sergei Rachmaninoff

ピアノ・ソナタ第1番 ニ短調 Op.28

(オリジナル版／日本初演)

Piano Sonata No.1 in D minor Op.28

(Original version / Japan premiere)

第1楽章 アレグロ・モデラート

I. Allegro moderato

第2楽章 レント

II. Lento

第3楽章 アレグロ・モルト

III. Allegro molto

PROGRAM NOTES

ラフマニノフ：ピアノ・ソナタ第1番

オリジナル版の貴重な日本初演

モスクワの音楽一家に生まれ、いまや国際舞台で活発な活動を展開しているルーカス・ゲニューシャスは、あるときモスクワにあるロシア国立音楽博物館でラフマニノフのピアノ・ソナタ第1番のオリジナル手稿譜に出会い、45分の「生の音楽」に強く魅了される(通常演奏される改訂版は第1楽章と第3楽章に手が入れられ、35分になっている)。2023年にはスイスのルツェルン湖畔のラフマニノフの別荘においてこのオリジナル版を用いた世界初録音を敢行、多数の受賞に輝いた。今回はそのオリジナル版での日本初演となる。

シューベルトの「即興曲集」との組み合わせは、本人いわく「究極の透明感、非常に高度なシンプルさ、永遠なる美しさというものを追い求めたのがシューベルトとラフマニノフ。ラフマニノフはピアニストとして多くのシューベルトの作品を演奏し、歌曲の編曲も行った。両者はポリフォニーの洗練度も傑出している」という。ラフマニノフの日本初演とともに、その組み合わせの妙も堪能したい。

フランツ・シューベルト(1797～1828)

4つの即興曲 Op.90 D899

シューベルトがもっとも得意としたのは「即興曲」や「楽興の時」などのキャラクター・ピースだった。それらの作品には歌が内在し、自由な構成を備え、ロマン豊かな世界を描き出している。ピアノ・ソナタではベートーヴェンら偉大な作曲家たちがシューベルトの眼前に高い頂のようにそびえていたが、小品では自身の歌曲を得意とする才能を存分に発揮することができたのである。

しかし、シューベルトがようやくピアノ作品の作曲家として注目され始めたとき、すでに晩年にさしかかっていた。とはいっても30歳を過ぎたばかりで、「即興曲作品90」を作曲したのは1827年、死の前年である。

シューベルトはこの年の5月下旬から6月初旬にかけて

ウィーン西部のドルンバッハという小さな村に滞在した。即興曲の数曲はこのときに書かれたものとされているが、どの即興曲が書かれたのか、いまだ明らかになってはいない。残りの曲は夏のグラーツ旅行のあと、10月から11月にかけて作曲されたと思われる。同年12月、作品90の4曲を受け取ったウィーンのトビアス・ハスリンガー社は、まず第1番と第2番をピースとして初版出版した。「即興曲集 Impromptus」というタイトルをつけたのもハスリンガーである。

**第2番** 3連符が流れ落ちるように下降し、半音階的に上昇する音形で始まる。中間部では舞曲風の主題が登場し、明るい雰囲気を醸し出す。その後、冒頭の主題が再現され、中間部の旋律を回想して終わる。即興曲のなかでも特に有名で、アンコール曲としても人気。

**第3番** 無言歌のような風情をたたえ、内声に置かれた6連符の分散和音がしっとりとした清楚な歌を奏でる。優美な旋律の美しさは最後のコードまで続く。

4つの即興曲 Op.142 D935

作品90と同様、1827年の秋ごろに書かれたとされる。しかし、出版はシューベルトの死後1838年のことで、デアベリ社から出され、フランツ・リストに献呈されている。

**第1番** これはピアノ・ソナタの第1楽章として書かれたのではないかと、シューマンは指摘している。分散和音が随所に効果的に用いられ、情熱的ではげしい感情を備えた主題と、ロマンティックで美しい曲想を併せ持ち、ソプラノとバスが対話を続ける。

**第4番** 軽快なリズムがスケルツォ的に展開されていき、ハンガリー風のリズムに彩られた変化に富む中間部が個性を放っている。

メヌエット 嬰ハ短調 D600

ドイチュ目録では、1929年以来オリジナル楽譜は所在不明となっているが、その後発見されて現在はモルガン・ライブラリーに収められているようだ。

曲はわずか16小節で、付点のアウトタクトから開始し、下降する旋律、浮遊するような主和音のハーモニー、

伊 熊 よ し 子 (音楽ジャーナリスト)

しばしば顔をのぞかせる装飾音などが特徴。13小節目のアウトタクトから冒頭のモチーフが左手に登場する。

セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)

ピアノ・ソナタ第1番 ニ短調 Op.28

(オリジナル版／日本初演)

ラフマニノフはピアニストとして出発した音楽家であり、そのピアノ作品はピアニストにとって非常に重要かつ魅力あるものとなっている。1873年3月20日、ロシアのノヴゴロド州の小村オネガに生まれたラフマニノフは、ペテルブルクとモスクワの音楽院に学び、ここでピアノをシロティに、作曲をタネイエフおよびアレンスキーに学んだ。

卒業後はピアニストとしてモスクワ、ドレスデン、アメリカの各地に演奏旅行に出向き、各地に定住しながら、晩年はアメリカのビヴァリーヒルズに居を定めて作曲と演奏の両面で活躍し、ここで1943年3月28日に亡くなっている。

ラフマニノフのピアノ作品は古典的な技法とロマン的な精神が息づいているもので、ことに抒情的な旋律は人の心を強くとらえる。さらにロシアの国民性が曲に反映され、スラヴの色彩が濃厚に感じられる。それはソロ作品でもコンチェルトでも同様の特質であり、情熱的な表現、抒情性などの面から見て、典型的なロシア作品といえる。

ラフマニノフは1906年11月に妻と娘を連れてドレスデンに移り、1907年11月から1908年5月にかけて、静かな環境のもとでピアノ・ソナタ第1番は作曲されている。3楽章構成で、当初はゲーテの「ファウスト」を題材としていたが、この発想はその後放棄された。とりわけ終楽章が長大で、超絶技巧を要する。

**第1楽章** アレグロ・モデラート、ニ短調～ニ長調、序奏付きのソナタ形式。2分の2拍子からテンポ、拍子が目まぐるしく変化する。

**第2楽章** レント、ヘ長調、4分の3拍子、3部形式、最後にかデンツァを有する。

**第3楽章** アレグロ・モルト、ニ短調、2分の2拍子、序奏付きの自由なソナタ形式。第1楽章の序奏が随所に登場し、再現部では第2主題、第1主題の順に変形されて再現され、悲劇的なフィナーレを迎える。